イギリスの児童文学を用いた小学校教員養成課程ワークショップ ー認識語彙向上をめざしてー

執行 智子 [1]　カレイラ 松崎 順子 [2]　吉田 真理子 [3]　舩田 まなみ [4]

[1] 白梅学園大学 子ども学部 〒187-0032 東京都小平市小川町 1 丁目 830
[2] 東京経済大学 全学共通教育センター 〒185-0021 東京都国分寺市南町 1 丁目 7–34
[3] 津田塾大学 学芸学部 〒187-0025 東京都小平市津田町 2 丁目 1 番 1 号
[4] 白百合女子大学 文学部 〒182-0001 東京都調布市緑ケ丘 1 丁目 25 番地

E-mail: [1] shigyo@shiraume.ac.jp, [2]carreira@tku.ac.jp, [3]yoshida@tsuda.ac.jp, [4]mfunata@shirayuri.ac.jp

あらまし　本研究では、小学校教員養成課程の「外国語」科目においてイギリスの児童文学であるルイス・キャロルの『子ども部屋のアリス』を題材とした読解活動とドラマワークショップを行ない、事前事後に行った認識語彙 can-do test の結果において、30 項目中、7 項目が有意に高かったことが明らかになった。また、認識語彙 can-do test で有意差のあった項目の 71.4%が読解活動において受講生が記載した語彙項目に含まれていたことが分かった。

キーワード　小学校教員養成課程，読解活動，ドラマワークショップ，付随的語彙学習

A Literary Workshop at the Elementary Teacher Training Program: Using Children's Literature to Develop Learners' Vocabulary Recognition

Tomoko Shigyo [1]　Junko Carreira Matsuzaki [2]　Mariko Yoshida [3]　and　Manami Funata [4]

[1] Faculty of Child, Shiraume Gakuen University　1-830 Ogawa-cho, Kodaira-shi, Tokyo, 187-0032 Japan
[2] Center for General Education, Tokyo Keizai University　1-7-34, Minami-cho, Kokubunji-shi, Tokyo, 185-0021 Japan
[3] College of Liberal Arts, Tsuda University　2-1-1, Tsuda-machi, Kodaira-shi, Tokyo, 187-0025 Japan
[4] Faculty of Liberal Arts, Shirayuri University　1-25 Miedorigaoka, Chofu-shi, Tokyo, 182-0001 Japan

E-mail: [1] shigyo@shiraume.ac.jp, [2]carreira@tku.ac.jp, [3]yoshida@tsuda.ac.jp, [4]mfunata@shirayuri.ac.jp

Abstract　In the "Foreign Language" course of an elementary school teacher training program, a reading comprehension activity and drama workshop based on Lewis Carroll's *The Nursery "Alice"*, adapted by the author from *Alice's Adventures in Wonderland* for younger readers, were conducted. The results of the post-recognition vocabulary can-do test had 7 out of 30 items which were significantly higher than that of the pre-recognition vocabulary can-do test. In addition, 71.4% of the vocabulary items which were significantly higher in the post-recognition vocabulary can-do test were those listed by the students in the reading comprehension activity.

Keywords　Elementary teacher training Program, Reading activity, Incidental vocabulary learning, vocabulary recognition

1. はじめに

現在、小学校で行われている「外国語」「外国語活動」を教室で実施する上で、児童が興味・関心を持って積極的にやりとりするために（文部科学省, 2017a）児童の実態を理解している小学校担任教員が関わることが求められている。特に、児童のコミュニケーション能力育成や外国語学習のための十分な input の確保（大槻, 2020；櫻井,

執行智子・カレイラ松崎順子・吉田真理子・舩田まなみ, "イギリスの児童文学を用いた小学校教員養成課程ワークショップー認識語彙向上をめざしてー"，言語学習と教育言語学 2024 年度版, pp. 26-33, 日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編集，早稲田大学情報教育研究所発行, 2025 年 3 月 31 日.
Copyright © 2024-25 by Shigyo, T., Matsuzaki, C, J., Yoshida, M., & Funata, M. All rights reserved.

2018)や、内容と言語を統合する学習である CLIL 実施のためには、教室での担任教員の英語力は不可欠である（執行・カレイラ, 2021）。

文部科学省は「中央研修」「中核教員研修」「校内研修」と教員研修をシステム化し、すべての教員が「外国語」「外国語活動」を担当するための英語力や英語指導力を養成する機会を充実させつつある（文部科学省, 2017b）。しかしながら、小学校教員のアンケートからは、依然として自らの英語力不足が授業を行う上で不安材料であることが明らかになっている（松宮, 2010；大槻, 2020；イーオン, 2021）。

羽澄（2018）や髙橋（2022）は、小学校教員養成課程の教材として児童文学（絵本，子供向けの歌や詩等）を用いることが、英語の発音、リズム、強弱のつけ方等についての知識や実践力（羽澄, 2018）や、「豊かな文脈を生かすための指導力」（髙橋, 2022, p. 6）の育成を可能にすると述べている。また、吉井（2013）は、児童文学を用いた読解活動やドラマ活動などの言語活動は、語彙を自然に身につけていく付随的語彙学習を引き起こすと報告している。これらのことから、小学校教員養成課程において児童文学を教材にした言語活動は、小学校外国語の授業を執り行う上で欠かすことのできない英語特有の音声や文脈に沿った語彙の学習を促進できるのではないだろうか。

本研究では、小学校教員養成課程において、イギリスの児童文学を用いた学習者の自主性および自律性を尊重した読解活動とドラマワークショップが参加者の語彙力の向上に影響を与えるかどうか調査することを目的とする。

2. 先行研究

2.1 教員養成における児童文学

2017 年度より実施されている「小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラム」（東京学芸大学, 2017）では、「学習、指導、評価に関する基本的な知識や指導技術を身に付ける」ための「外国語の指導法」と、「授業実践に必要な実践的な英語運用力と英語に関する背景的な知識を身に付ける」ための「外国語に関する専門的事項」の 2 つの科目を設置している。特に、後者には以下の学習項目が含まれている。

（1）授業実践に必要な英語力
　① 聞くこと
　② 話すこと［やり取り・発表］
　③ 読むこと
　④ 書くこと
（2）英語に関する背景的な知識
　① 英語に関する基本的な知識（音声，語彙，文構造，文法，正書法等）
　② 第二言語習得に関する基本的な知識
　③ 児童文学（絵本，子供向けの歌や詩等）
　④ 異文化理解

羽澄（2018）は、（2）③にある「児童文学（絵本、子供向けの歌や詩等）」を「言語習得のために利用されることが期待されている」（p. 165）項目であり、具体的には「英語の音声やリズム、韻などを児童が体感するための教材になりうる絵本や歌や詩」（ibid.）を指していると述べている。それを実行する、つまり、読み聞かせや歌を歌ったりするために、小学校教員は「基礎知識として、児童文学には幅広く触れること」（p. 166）や、「英語の発音、リズム、強弱のつけ方等についての知識や実践力を身につけ」（p. 165）ることが必要であると述べている。

髙橋（2022）は、「『言語活動』を積極的に行うことを推奨する現在の小学校英語教育において、児童文学は大きな役割を果たすことが期待できる」（p. 3）とし、物語教材を小学校の外国語（英語）教育へ導入することを奨励している。また、そのために小学校教員養成課程では、将来教員となる受講生が「幅広い地域で語り継がれてきた子ども向けの物語」（p. 6）に興味関心を高めるように児童文学を扱っていくべきであり、さらに、「教室という限られた空間の中」（ibid.）で、「物語にある豊かな文脈」（ibid.）を活用して言語活動を実施・指導できる力を育成していくべきであると述べている。

2.2 小学校教員養成課程の授業における児童文学の実践—*Alice*

羽澄（2018）は、ルイス・キャロル著の *Alice's Adventures in Wonderland*（『不思議の国のアリス』1865）について「言葉遊びやマザーグースなど伝承文学のパロディ、世相への皮肉を多く含む作品は、語彙や表現、内容の難易度が高く直接小学校の授業に取り入れるには相当な工夫が必要になり、生の教材としては不向きかもしれないが、英語表現の豊かさにあふれている」（p. 167）と紹介し、「英語を教える者として知っておくとよい著名なイギリス児童文学の一つ」（ibid.）としてあげている。

小学校教員養成課程で児童文学を扱った実践研究として、吉田・執行・カレイラ・舩田（2023）

が挙げられる。小学校教員養成課程の「初等英語」の授業において *Alice's Adventures in Wonderland* をルイス・キャロル自身が「乳幼児向け」（吉田・佐藤・執行, 2021）に書き直した *The Nursery "Alice"* を題材とした英語のドラマワークショップを取り入れた試みである。

5 回の「外国語」の授業において実施したドラマワークショップに参加した小学校教員養成課程に在籍している大学 3 年生たちが記述した振り返りの分析から、「ワークショップ開始時には、英語に対する苦手意識から抵抗感のあった学生たちにとっても、グループワークの中で対話的な姿勢を育み、協働的に『作り上げる』プロセスを楽しみ、緊張しながらも助け合って英語での発表に臨み、『自分たちでもできるという成功体験』となり、結果としてワークショップ活動への満足感と達成感につながった」（吉田他, 2023, p. 118）と報告されている。

2.3 児童文学と語彙力向上

外国語学習において語彙力を向上させることは、外国語学習にとって、4 技能を形成したり(Widaningsih, 2009)、ことばを理解したり(Nation, 1990)、言語能力の使用を養うことを促進したり(Nation, 1990)、世の中を理解するために複雑な思考方法を発展させたり(Stahl & Nagy, 2006)、うまくやり取りができたり(Muzdalifah, 2018)し、読解能力にも影響を及ぼす(Sedita, 2005)とされ、外国語学習の成功の鍵とも言われている。

小学校外国語教育においても語彙力を向上させることは、それ以後の外国語学習を促進させるためにおいても肝要である。

語彙向上の方法として、「語彙のリストを作り意図的に学習していく方法」（吉井, 2013, p. 40）である「意図的語彙学習」と「内容理解を主な目的に読んだり聴いたりするうちに、出てきた単語を自然に覚えていく方法」（ibid.）である「付随的語彙学習」がある。後者では読解活動を通しての付随的語彙学習などが挙げられるが、中でも、辞書を用いて読解活動を行った方が辞書を用いずに読解活動を行うよりより多くの単語を学習できることが報告されている（Luppescu & Day, 1993; 吉井, 2006）。

羽澄（2018）や髙橋（2022）が述べている児童文学（絵本）の読み聞かせを行い、児童が物語の場面から語彙を獲得する方法は「付随的語彙学習」と言えるであろう。実際、Cameron（2001）によれば、児童文学には、物語の中の文学的な文章や詩ではことばの繰り返しが多く含まれているので、学習者が次にくることばを予測でき、積極的に聞こうとしたり、一定の決まった物語の展開や絵から面白いリズムのことばやオノマトペなどのあまり聞きなれないことばを理解することできるので、学習者の語彙を豊かにすることができると述べている。

金山（2020）は小学校教員養成課程の「初等英語」の受講生を対象にした小学生に対する最適な英語語彙指導方法についての調査を行った。受講生自身は中学生・高校生の時に使用していた語彙学習方法は、「暗記」「繰り返し」「書いて覚える」「単語」「赤シート」などのキーワードから意図的語彙学習を行なってきたという実態が明らかになっているものの、「児童には暗記を推奨する方法が適切ではないと考えている学生が一定数いる」（p. 50）としている。その中には、「実際に発音させることが重要である」、「言語活動の中で学ぶべきである」、「歌の中で教えると良い」、「視覚教材を用いて英単語を導入すると良い」などの回答があり、語彙が使用される文脈や理解、リズムの習得が児童の外国語学習には重要であること受講生が理解していることが伺われる。

語彙の付随的学習を教室での言語活動として実現するためにはどのような方法があるだろうか。一つの言語活動として、児童文学を活用したドラマ活動が挙げられる。吉田他（2023）では、クリエイティブ・ドラマに参加することは「7. 語彙力をつけ発話と表現力のよい訓練となる」（p. 118）と紹介している。Anaam (2020)は、15~16 歳の学生を対象とし、英語（外国語）の語彙を訳読式で学習する従来のやり方のグループとドラマ活動を取り入れたグループに分けて行った。ドラマ活動には、ロールプレイ、パントマイム、即興劇などを取り入れた。その結果、事前に実施した語彙テストの点数には、どちらのグループにも有意な差は見られなかったが、事後の語彙テストではドラマ活動を取り入れたグループが従来のやり方のグループより有意に点数が高かったことから、ドラマ活動は英語（外国語）の語彙を発達させる有効な方法であると報告している。これは、ドラマ活動では思考や感情を育成し言語を文脈に結びつけることで意味に重点を置き（Anaam, 2020）、学習者の既習の知識と新たな思考を結びつけたりしながら新出の語彙を学習することができる（Susanto, 2017）からである。

以上のことから、小学校外国教育において、児童文学を通して児童に英語の言語的基礎知識である音韻構造や統語構造、語彙などを身につけさせたり（羽澄, 2018）、児童文学にある「豊かな文脈を生か」（髙橋, 2022, p. 6）した言語活動を教室で実践するために、小学校教員養成課程においても児童文学を導入し、受講生が児童文学を読んだり、言語活動としてのドラマ活動を体験することが肝要であると思われる。また、小学校外国語指導のために必要な語彙力が向上すると思われる。

3. リサーチ・クエスチョン

小学校英語教育において欠かすことのできない小学校の担任教員の英語の語彙力向上のために小学校教員養成課程「外国語」において「英語を教える者として知っておくとよい著名なイギリス児童文学の一つ」（羽澄, 2018, p. 167）である『アリス』を用いた自主的読解活動とドラマワークショップを行い、参加者が意味を理解できる語彙である認識語彙（Laufer & Paribakht, 1998）にどのように影響するかを検証するために、以下のリサーチ・クエスチョンをおく。

1. 参加者の認識語彙はドラマワークショップの後で増加するであろうか。
2. ドラマワークショップ開始前に題材の読解活動で参加者が記入した vocabulary notes にはどのようなことを記載し、それは認識語彙 can-do test とどのように関係しているであろうか。

4. 本研究の目的

小学校教員養成課程「外国語」において小学校の担任教員の英語の語彙力向上のために児童文学を用いた自主的読解活動とドラマワークショップが参加者の認識語彙にどのように影響するかを調査することを目的とする。

5. 参加者

参加者は東京にある大学の小学校教員養成課程に在籍している 3 年生、10 名である。参加者は、コア・カリキュラムに指定されている「外国語」を受講している。

「外国語」の授業では、テキストに『小学校英語に児童文学を―絵本・ナーサリーライム・ストーテリングの世界に遊ぶ』(吉田・佐藤・執行, 2021) を使用し、2.1 で言及した「（1）授業実践に必要な英語力」および「（2）英語に関する背景的な知識」の学習項目を学んでいく。以下、「外国語」のシラバス内容（表 1）とテキストの内容項目である（表 2）。

表 1「外国語」シラバス内容

第 1 回	オリエンテーション、コミュニケーション能力とグローバリゼーション
第 2 回	小学校英語教育の変遷と母語および第 2 言語習得
第 3 回	母語習得と SLA の発達：子どもとことば
第 4 回	英語の歴史と特徴：絵本にある英語
第 5 回	異文化理解：絵本を楽しむ
第 6 回	英語の語彙、文法と構造：絵本とことばの学習
第 7 回	絵本の読み聞かせ
第 8 回	英語の音声：ナーサリーライムの紹介
第 9 回	英語の音声の特徴とナーサリーライム，英語の音声の指導：ナーサリーライムの活用
第 10 回	英語の児童文学：ストーリーテリングが育むもの
第 11 回	『アリス』を読む（vocabulary notes を作成する）
第 12 回	活動を体験しながらの英語のやり取り：『アリス』を使ったパフォーマンス準備
第 13 回	『アリス』を使ったパフォーマンスリハーサル
第 14 回	『アリス』を使ったパフォーマンス発表
第 15 回	パフォーマンスの振り返り　まとめ

表 2 テキスト内容項目

第 1 章	［鼎談］なぜいま小学校英語に児童文学なのか
第 2 章	絵本　～絵とことばが紡ぎ出す物語～
コラム 1	絵本の散歩道
第 3 章	大人も子どもも楽しめるナーサリーライム
第 4 章	ストーリーテリングから生まれた文学作品　～『アリス』を事例として～
コラム 2	ストーリーテリングの歴史

ドラマワークショップは、「外国語」の第 11 回目から第 15 回目までの 5 回の授業で行われた。ドラマワークショップの目的を「英語で読んだ文学作品を、ことば（外国語）とこころ、からだを通して表現し伝え合う」とし、題材を *The Nursery "Alice"*とした。ドラマワークショップで扱った章と手順は以下の通りである。

- 扱った章
  I. THE WHITE RABBIT
  II. HOW ALICE GREW TALL
  III. THE POOL OF TEARS
  IX. THE CHESHIRE-CAT
  X. THE MAD TEA-PARTY
  XI. THE QUEEN'S GARDEN
  XIII. WHO STOLE THE TARTS?
  XIV. THE SHOWER OF CARDS
- 手順

1. 『アリス』を読む
   グループに分かれ *The Nursery "Alice"*（以下、『アリス』とする）を読み、自分の担当箇所のわかりにくい語彙を抽出し、調べ、クラスで共有しているエクセルシート（google drive）に記入する
2. 『アリス』を使ったパフォーマンスの準備をする
   パフォーマンスとして取り上げる箇所を選出し、フォーカスすることや表現の方法について話し合い準備する。また、背景、小道具、声のトーン、ジェスチャー、間などについても話し合い、準備する。
3. 『アリス』を使ったパフォーマンスのリハーサルを行う
4. 『アリス』を使ったパフォーマンスの発表をする
5. パフォーマンスを振り返る

6. 方法

- 認識語彙 can-do test

ドラマワークショップの事前（第 11 回目授業の初め）と事後（第 15 回目授業の終了時）に認識語彙 can-do test を実施し量的に分析する。

認識語彙 can-do test は 3 件法（1：見たことがない、2：見たことはある、3：意味を知っている）で行う。また、認識語彙 can-do test に使用する語彙は各章から平均 6 語程度抽出している。以下認識語彙 can-do test に使用した語彙と語彙レベル、出現章数、出現回数である（表 3）。語彙レベルは、CEFR-J は 2008-2011 年度科学研究費補助金（基盤研究（A））課題番号 20242011『小、中、高、大の一貫する英語コミュニケーション能力の到達基準の策定とその検証』（研究代表者：投野由紀夫）の一環で構築された CEFR-J Wordlist 語彙表を基にした。それぞれのレベルは以下の通りである。

A1:小学校～中学 1 年程度
A2:中学 2 年～高校 1 年程度
B1:高校 2 年～大学受験レベル
B2:大学受験～大学教養レベル

表 3 認識語彙 can-do test 語彙

		CEFR-J	出現章数	出現回数
1	accident	A2	1	1
2	afraid	A1	1	1
3	card	A1	2	4
4	ceiling	B2	1	1
5	comfortable	A2	2	2
6	curious	B1	6	9
7	fan	A1	1	4
8	frighten	A2	4	5
9	guess	B1	4	5
10	guilty	B1	2	4
11	hall	A1	2	7
12	hole	A1	2	3
13	hurry	A1	4	6
14	jury	B2	2	6
15	lesson	A1	2	5
16	lock	A2	1	7
17	mad	A2	2	5
18	pillow	B1	1	2
19	plate	A2	1	4
20	prisoner	B1	1	2
21	punish	B1	3	5
22	rose	A1	1	6
23	rude	A1	1	1
24	straw	B1	1	3
25	tart	NA	2	9
26	taste	B1	1	1
27	temper	B1	1	3
28	underground	B2	1	1
29	witness	B1	1	4
30	wrist	B1	1	2

- vocabulary notes

「第 11 回『アリス』を読む」において学生がわかりにくい語彙を抽出し、辞書を使用し分かったことを記入するために作成した vocabulary notes において抽出語彙を分析し、認識語彙 can-do test との関係を調査する。

7. 結果

7.1 認識語彙 can-do test

認識語彙調査をするためにドラマワークショップの事前（第 11 回目授業の初め）と事後（第 15 回目授業の終了時）に認識語彙 can-do test を実施した結果、事後テストにおいて有意に高かった項目（$p < .05$）は以下の 7 項目であった。これ

らの 7 項目のうち、A1 レベルは 0 項目、A2 レベルは 1 項目、B1 レベルは 4 項目、B2 レベルが 1 項目であった。（表 4）

表 4 有意差のあった項目と語彙レベル

有意差のあった項目	語彙レベル
ceiling (p. = 0.004)	B2
curious (p. = 0.003)	B1
mad (*p.* = 0.081)	A2
prisoner (*p.* = 0.096)	B1
punish (*p.* = 0.024)	B1
tart (*p.* = 0.001)	NA
wrist (*p.* = 0.015)	B1

また、認識語彙 can-do test にある語彙のそれぞれのレベルにおける有意差のある語彙の占める割合は以下のとおりであった（表 5）。

表 5 有意差のある語彙が、認識語彙 can-do test のそれぞれのレベルの語数に占める割合

語彙レベル	認識語彙 can-do test にある項目数	有意差のある項目数	有意差のある項目数が占める割合
A1	9	0	0%
A2	6	1	17%
B1	11	4	36%
B2	2	1	50%
NA	1	1	100%

7.2 学生の作成した vocabulary notes

「第 11 回アリスを読む」において学生が作成した vocabulary notes を分析した結果、vocabulary notes に記入されていた抽出項目の総数は 131 であった。抽出された項目において、A1、A2、B1、B2 それぞれの語彙レベルの占める割合は

- A1 レベル 41.07%
- A2 レベル 18.75%
- B1 レベル 12.05%
- B2 レベル 5.80%
- NA 18.75%
- PropNoun_Num 3.57%

であり、また、記載されているそれぞれの項目は、1 語のもの 62 (47%)、2 語以上のもの 69 (53%)であった。

さらに、重複して記載されている項目は、10 項目で、重複が同じ章、異なる章であるかは以下の通りであった（表 6）。

表 6 vocabulary notes に記載のあった重複項目

項目	重複回数	同じ章	異なる章
all along	2		✔
curious	3	✔	✔
dormouse	2		✔
frightened	2		✔
Knave	2		✔
perhaps	3		✔
reach	3	✔	✔
settle	2		✔
squeez	2	✔	
trial	2		✔

また、vocabulary notes に記載された項目のうち can-do test にある項目は以下の 13 項目であった。ただし、認識語彙 can-do test にある項目を含んでいる 2 語以上からなる項目も含む(表 7)。

表 7 vocabulary notes に記載された項目のうち認識語彙 can-do test にある項目

項目	記載回数
ceiling	1
curious	3
frighten	1
frightened	3
jury-box	1
punish	1
punished	1
straws	1
tarts	1
temper	2
uncomfortable	1
witness	1
wrists	1

さらに、vocabulary notes に出現した項目のうち認識語彙 can-do test で有意差があった項目は 5 項目であった（表 8）。

表 8 vocabulary notes に出現した項目のうち can-do test で有意差があった項目

項目	記載回数
ceiling	1
curious	3
punished	1
tarts	1
wrists	1

8. 考察

8.1 参加者の認識語彙

リサーチ・クエスチョン 1「参加者の認識語彙

はドラマワークショップの後で増加するであろうか」を調査するために、ドラマワークショップの事前と事後に認識語彙 can-do test を実施した結果、事後テストにおいて有意に高かった項目 ($p < .05$) は 30 項目中 7 項目（23%）であり、特に B1、B2 レベルの語彙に有意差が高い項目が多かった（B1 レベル 36%、B2 レベル 50%）。このことから、ドラマワークショップにおいて多いとはいえないが、中級者レベルである B1、B2 に含まれる認識語彙が増加することがわかった。これは、普段あまり使用しない言語を文脈に結びつけることで意味に重点を置くドラマ活動（Anaam, 2020）の中で、学習者は既習の知識と新たな思考を結びつけたりしながら新出の語彙を学習することができる（Susanto, 2017）からであると考えられる。

上記 7 項目のうち 1 項目（*ceiling*）以外は *The Nursery "Alice"* の中で複数回出現していた。*curious* と *tart* の 2 項目は最多である 9 回、*mad* と *punish* は 5 回、*prisoner* と *wrist* は 2 回である。さらに、*curious, mad, punish, tart* においては、複数章において出現し、*punish, tart, wrist* では、原文中には接尾辞が付与され、can-do test で出題された形式とは異なる形式で複数回出現していた（punish: *punish* 1 回、*punishment* 2 回、*punished* 2 回、tart: *tart* 0 回、*tarts* 9 回、wrist: *wrist* 0 回、*wrists* 2 回）。これは、同じ物語でも異なる章（異なる文脈）において何度も同じ繰り返し出合ったり（Cameron, 2001）、接尾辞が付与された異なる形式でも意味に重点を置いているドラマ活動（Anaam, 2020）であるから語幹の意味を推測・認識できたのだと考えられる。

8.2 参加者の作成した vocabulary notes

リサーチ・クエスチョン 2「ドラマワークショップ開始前に題材の読解活動で参加者が記入した vocabulary notes にはどのようなことを記載し、それは認識語彙 can-do test とどのように関係しているであろうか」を調査するために、参加者が作成した vocabulary notes を分析した結果、抽出項目数は合計 131 項目、そのうち 1 語のみの記載は 62 項目（47%）、2 語以上は 69 項目（53%）であった。これは、学生は、テキストを読みながら、自らが意味を調べた語のみを記載したばかりではなく、テキストの文脈に合わせて語の意味を調べ、その語だけではなくその語を含む句を文脈に合わせた適切な意味で記載しているからである。また、vocabulary notes に記載されている語彙レベルにおいては A1 レベルと A2 レベルを合わせると過半数を占めていたこと、さらに認識語彙 can-do test の有意差のある項目のうち B1 レベルが多かったことを考え合わせると、vocabulary notes には既知の A1、A2 レベルの語でも、テキストの中で文脈に沿わせるとよく意味の通らない語が存在しており、それをテキストの文脈に合わせるために意味を調べた結果を vocabulary notes に記載したのではないかと推測できる。これは、読解活動の中で起こる付随的語彙学習（Luppescu & Day, 1993; 吉井, 2006）であり、文脈を活かした学習（髙橋, 2022）だったと言えるのではないだろうか。

参加者が抽出した項目のうち、認識語彙 can-do test に出現したものは 13 項目、そのうち重複記載されていたものは、*curious*（3 回）、*frightened*（3 回）、*temper*（2 回）であった。また、can-do test で有意差があった項目は、5 項目、*ceiling, curious, punish (punished), tart (tarts), wrist (wrists)* で、語彙認識 can-do test の有意差のあった項目の 71.4%を占めていた。このことから、vocabulary notes に記載することが事後の語彙認識 can-do test になんらかの影響を及ぼしている可能性があると考えられる。

9. まとめ

本研究では小学校教員養成課程において、イギリスの児童文学を用いた学習者の自主性および自律性を尊重した読解活動とドラマワークショップが参加者英語力、特に語彙力の向上に与える影響について調査した結果、自主的読解活動とドラマワークショップの付随的語彙活動は認識語彙を幾分増加させたことが明らかになった。参加者はイギリスの児童文学を原文で読みドラマの活動をするプロセスで、文脈に合った語彙の意味をしっかりと認識し獲得したといえよう。しかしながら、読解活動とドラマワークショップが認識語彙 can-do test にどのように影響しているかを明らかにすることができなかった。リサーチデザインを見直し、今後の課題としていきたい。

文　献

イーオン（2021）「全国現役小学校教員を対象に『小学校の英語教育に関する教員意識調査 2021 夏』を実施コロナ禍で導入 2 年目に入った、小学校での英語教育の実態を調査」参照 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000030.000062811.html（2021 年 9 月 2 日）

Anaam, F. M. S. (2020). Effect of drama on enhancing vocabulary learning in English for secondary school students in Yemen. *ENSEMBLE 2*(1). 26-35. https://doi.org/10.37948/ensemble-2020-0201-a004

Cameron, L. (2001). *Teaching languages to young learners*. Cambridge University Press.

羽澄直子（2018）「小学校外国語活動・外国語科指導の背景知識としての英米児童文学」名古屋女子大学紀要人文・社会編』64(人・社), 163-168.

金山幸平（2020）「小学生に対する最適な英語語彙指導方法について ― 日本人大学生の自由記述課題から ―」『北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)』70(2), 43-51.

Laufer, B., & Paribakht, T. (1998). The relationship between passive and active vocabularies: effects of language learning context. *Language Learning 48*, 365-391.

Luppescu, S., &Day, R. (1993). Reading, dictionaries, and vocabulary learning. *Language Learning, 43* (2), 263-287.

松宮奈賀子（2010）「小学校教員を目指す学生の『外国語（英語）活動に関する演習科目』履修がもたらす学生の変容」*Journal of Quality Education, 3*, 111-134.

文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』開隆館出版

文部科学省（2017b）『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック　研修指導者編』参照 https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm（2024 年 4 月 21 日）

Muzdalifah, I. (2018). Rising English Vocabulary Mastery: Crosswords Puzzle Games for Computer Science Students., *IOP Conf. Series: Earth and Environmental Science* 175, 1-5, doi:10.1088/1755-1315/175/1/012075.

Nation, P. (1990). *Teaching and Learning Vocabulary*. Newbury House.

大槻友紀（2020）「小学校英語教育を担う教員の意識調査と支援の方向性」『国際日本学研究論集』（12）, 65-78.

櫻井千佳子（2018）「小学校教員養成課程における英語運用能力の育成に関する一考察」武蔵野教育學論集』(4), 91-107.

執行智子・カレイラ松崎順子（2021）「小学校における数学 CLIL に必要な言語使用 ―中学校教員の専門を生かすために―」『言語学習と教育言語学:2021 年度版』21-28.

Sedita, J. (2005). Effective Vocabulary Instruction. Published in *Insights on Learning Disabilities, 2*(1) 33-45.

Stahl, S. A. & Nagy, W. E. (2006) *Teaching Word Meanings*. Erlbaum Associates.

Susanto, A. (2017). The teaching of vocabulary: A perspective. Jurnal KATA: Penelitian tentang Ilmu Bahasa dan Sastra, l (2), 182-191.

髙橋和子（2022）「小学校検定教科書における児童文学― 教員養成への示唆 ―」『明星大学研究紀要–教育学部』(12), 1-15.

東京学芸大学（2017).『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 28 年度報告書』Retrieved April 21, 2023, from https://www2.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/report28_all.pdf

吉井誠（2006）「付随的語彙学習における単語学習と単語検索頻度語彙サイズとの関係について」『熊本県立大学文学部紀要』(1), 143-156.

吉井誠（2013)「語彙学習における付随的学習と意図的学習の融合」『文彩』9, 40-38

吉田真理子・執行智子・カレイラ松崎順子・舩田まなみ（2023）「英語の児童文学を用いた小学校教員養成プログラムの 開発― 『アリス』を題材として ―」*JES Journal* 23, 116-131.

吉田真理子・佐藤桂子・執行智子（2021）『小学校英語に児童文学を一絵本・ナーサリーライム・ストーリーテリングの世界に遊ぶ』春風社.

Widaningsih, R. (2009). Increasing vocabulary mastery using crossword puzzle technique in inclusion program [Unpublished research paper for the Bachelor Degree of Education]. *English Department, School of Teacher Training and Education, Muhammadiyah University of Surakarta* http://eprints.ums.ac.id/3932/1/A320050034.pdf